

『オナサポメイド～丁寧にされたり<sup>さげす</sup>蔑<sup>まれたり</sup>しながら、シコシコ音  
声で発射したいご主人様へ～』 Bパート

CV 山田じえみ子

企画・台本 オナサボ総合研究所

---

【あらすじ】妹メイドがお休み前のご主人様のために朗読します。

[妹メイド] :

こんばんわ、ご主人様。<sup>いもうと</sup>妹<sup>いもうと</sup>メイドです。

お休み前の朗読に参りました。

はい、今夜は<sup>わたし</sup>私が<sup>いた</sup>おつとめ致します。

この朗読オナニーに関しては<sup>まったく</sup>全くのフリースタイルですから、シ  
コシコされてもされなくとも、道具を使われても使われなくとも構<sup>かま</sup>  
いません。

ひごろ 日頃お姉様より、ご主人様は「お早いくせにイジられ好きで、救い  
ようのないM男」…との指導を受けておりますので、それに即した  
ものを用意しました。

そうろう 早漏にピッタリな、「E c o 朗読」を心がけて参ります。

よろしいですか？

いちにんしようぼくしてん  
朗読スタイルは、一人称僕視点です。

さっそく  
では早速…。

[僕] :

『僕は妹に管理されている』

毎晩妹が僕の部屋にやってくる。

僕を <sup>もてあそ</sup>弄 び、おもちゃにするためだ。

妹の言葉をそのまま借りれば、「愛玩」だそうだ…。

なかなか信じてもらえない。兄である僕が逆らえなくなってしまう理由…。それは彼女に生まれつき不思議な力が備わっているからだ。目を見て言葉を聞いただけで、手足が自然に <sup>そな</sup>操 <sup>あやつ</sup>られ、いつの間にか心まで支配されてしまう…。

誰にも抵抗することができない、必ずそうなる。とても恐ろしい力だ。

そろそろ板張りの廊下から、あの細い足音が聞こえてくる…。

ほら、やって来た。

それはまさに僕にとって、苦悩と快楽のはざまに突き落とされる間際の…服 徒 <sup>ま</sup>の合図のように響いていた。

[妹] :

お兄様、下着は穿いて頂けましたか？ 昨晩 私 <sup>さくばんわたし</sup>が用意したヨレヨレの下着です。

[僕] :

当然僕は穿いていた。

そして毎晩この時刻になると、僕の 体 <sup>じこく</sup>は下着姿でベッドに仰向 <sup>からだ</sup>けになったきり、身動きが取れなくなってしまうのだ。

[妹] :

ふふ、お似合いですよ？ では、穿 <sup>は</sup>いているパンツの左側から、お兄様のアレを、ハミちゃんさせてください？

そうです、お上手ですね…？

まるでどこかで経験されたことのあるような手際です。  
てぎわ

そうなんですか？ お兄様。

よもや私以外の誰かに愛玩されているわけはないと、信じていましたが…。

たとえ夢の中の出来事であったとしても、許すことはできません。

今夜はお仕置き確定ですね？ ふふふ。

[僕] :

一瞬だけ、妹の眼差しが冷たいように感じた…。いや、表情にこれといった変化はない。いつも通りだ。

[妹] :

お兄様？ 脚をお開きになってください？  
あし ひら  
いし  
ご自身の意思で。

[僕] :

その言葉で、思わず脚がM字に開いてしまう。

僕の脳が命令を下しているのではない…あるいはそうかも知れない。

イエスかノーか、考えることさえ無意味だ。

必ず従ってしまうのだから…。

妹の白く細い手が、僕の無防備な睾丸に伸びていく。

じじゅう だえん にくだま うえ  
自重でだらりと下がった二つの橢円の肉玉を、小さな手の平の上  
あ  
に持ち上げ、いつもと変わらぬクネクネとした指の動きで、器用に  
転がしている。

ぬるりぬるりと擦れあう肉玉が、互い違いに上下にはじかれあって、  
てあそ はいとくかん ここち  
妹の手遊びにされている背徳感さえ…心地いい。

下半身の欲動は動物の本能にまかせて、ムクムクと隆起するむきだしの塊に変わっていく…。

妹は僕を愛玩している。だからペットである僕を痛めつけたり、お仕置きすることなどあり得ないのだ。

[妹] :

〈右の耳元へ 無聲音の台詞です〉

そうお思いになりますよね？ お兄様。  
んっ…。

〈グジュ…〉

[僕] :

突然に加えられた強い握力に、睾丸が悲鳴をあげた。  
ずいぶん以前から僕の口は封じられていて、声を出すことができない。

[妹] :

ふふつ…。

〈グジュジュ…〉

[僕] :

ジリジリと握りつぶされていく睾丸が、もとの橢円の形より、いつもそう歪に変形させられる様など、か弱い玉の持ち主であれば、誰だって想像したくはないはずだ。

[妹] :

愛玩の方針を変えたのですよ？ お兄様。

いつまでも妹に甘やかされてばかりでは…兄として恥ずかしいですよね？

だからこうです。んっ…。

〈ギュルル…〉

[僕] :

それは今まで僕が経験したことのない、妙な痛みだった。

妹の手首がクルリとひねられると、さっきまでそこにあった右の玉

と左の玉が、反対側を向き…入れ替わっていることに気づいた。

袋の根元から回されている…。  
ね もと

まるでいらなくなつた古びた人形の首をねじ切るように。

これはだめだ…僕の睾丸からつながる輸精管までちぎれてしまう。  
こうがん ゆ せいかん

一気に血の気が引いていくのを感じた…。

[妹] :

ほら、回された金玉がぐる～っと一回転して、との位置まで戻つ  
てきました。

良かったですね？ お兄様。んつふふ。

私以外の誰かに愛玩されたとしても、こんなふうには構ってもらえ  
ませんよ？  
あいがん かま

ご自身の手で、反省のシコシコをしてください？

お出来になりますよね？ さあ。

[僕] :

妹に言われるがまま、右手が勝手に僕の欲動の象徴を…ペニスを  
つかんだ。

もうすっかり縮こまっている。  
ちぢ

睾丸を握りつぶされ、陰嚢ごとねじり回され…それでもいきり勃つ  
ている男がいたなら、それは真性のMだ。

〈シコシコ音が入ります〉

しなだれたペニスを上下に絞り上げてゆく…。

こんなに間近に見られていても、もう右手は止められない…。

[妹] :

すべ  
滑りは足りていらっしゃいますか？ お兄様。

ふつ、ふつ、ふつ！

これでカウパーが出るまではもつと思います。早く元気にしてくださいね？

[僕] :

いつもはもっと丁寧に、あの柔らかなピンクの唇に、僕のペニスを  
きゅういん 吸引し、唾液を含ませた舌を裏スジやカリ首の溝にからみつかせ、  
のど 喉の奥までじゅぼじゅぼと濡れそぼつまで、豊潤な「ぬめり気」  
をくれる妹が…僕をぞんざいに扱い始めている。

古びた人形になってしまったのか。飽きられてしまったのか。

ぎやくたい 虐待の続く下半身の痛みに耐えかねながら、僕はそれでも…捨て  
られたくない。

妹の期待に応えなければ…。

〈シコシコ音・チェンジ〉

[妹] :

ふふつ、そうですよ？ お兄様。

私を楽しませてくれたら、ペットとして、これからも愛玩してさし  
あげますね？

[僕] :

はあ…はあ…はあ…はあ…。

さげす まなざみお 蔑んだ眼差しで見下ろす妹の…半分に閉じられた 瞼の角度まで…

はあ…はあ…美しく感じる…。

はあ…はあ…もっと痛みをくれてもいい、いじめられてもいい…僕  
は妹が好きだ…はあ…はあ…。

まいにちまいばん 每日毎晩管理されてみたい、命令されてみたいんだ…はあ…はあ…。

ああつ…ああ…ああ…ああ…もっと…変態を見るような目で、僕を見つめ  
て欲しい…ああ…ああ…ああ…ああ…はあ…。

僕は妹が好きだ…ペットにされたい…ダメにされたい…はあ…はあ…  
…犯して欲しい、犯して欲しい犯して欲しい…はあ…はあ…はあ…  
僕をむちゃくちゃにして欲しいんだ…。

〈シコシコ音・チェンジ〉

あつ…ああ…ああ…ああ…ああ…ああ…ああ…ああ…はあ…はあ…。

おしつこを飲ませて欲しい…顔面に騎乗されて…はあ…はあ…ああ…  
…ああ…ああ…ああ…濡れた妹のおまんこを…舐めまくりたい…はあ…  
…はあ…はあ…はあ…。

何でも言うことを聞くから…金玉をつぶされてもいい…ああつ。

狂わせて？…狂わせて狂わせて狂わせて？

〈シコシコ音・チェンジ〉

ああつ…ああ…ああ…ああ…ああ…ああ…ああ…ああ…ああ…  
…あ…。

びゅるびゅる溢れ出した先走りが、僕の太ももまで垂れて…ペニス  
が最大限に勃ってる…はあ…はあ…んつ…ああ…このままアナルに  
指を突っ込まれたら…僕はイってしまうかもしれない…。

〈グポ、グジュリ…〉

うつ…んつ…ああつ…。

ああつ…ああつ…ああつ、ああつ、ああつ、ああつ、ああつ、ああ  
つ、あああつ気持ちいい。

出ちやう…漏れちゃう漏れちゃう…うう…ああつ…精液ぴゅぴゅつ  
と…発射しちゃう。

〈シコシコ音・チェンジ〉

んう…ああつ、ああつ、ああつ、ああつ、ああつ、ああつ、ああつ、  
ああつ、ああつ、ああつ、ああつ、ああつ、あああつ出るうう。  
イクイクイクイクイクイクイクイクイクいくうううう一つ。  
んあつ、あつ、ああ…。

[妹] :

んふふふ。

勢いよくぴゅぴゅ～っと、お出しになりましたね？ お兄様。素  
敵ですよ？

また明日からも愛玩してさしあげますので…。

しっかり『溜めて』おいてくださいね？ ふふつ。

[僕] :

体の細胞の一粒一粒までも、悦びに満ち溢れてゆく…。

受け入れられたのだ。

僕は妹に管理されている、こんなに幸せなことはない。

[妹メイド] :

さあ、これで朗読はおしまいですよ？

楽しんで頂けましたか？

いもうと わたし  
最後に 妹 メイドの 私 から、ご主人様がぐっすりとお眠りになれ  
あんみんやく だ  
ますように、安眠薬をお出ししておきますね？

お口をア～ンと、開いてください？

いきますよ～？

ふつ、ふつ、ふつ！

はい、ごっくん♪

では…。

おやすみなさいませ、ご主人様。

おわり